

すぎなみ大人塾

基調講演「もうひとつの人生」

直木賞作家 逢坂 剛 氏

日時：2005年11月2日（水）

会場：セッション杉並 視聴覚室

【プロフィール】

- ・1943年 / 東京都文京区生まれ。中央大学法学部卒業。
- ・1966年 / (株)博報堂入社後、『暗殺者グラナダに死す』で第19回オール讀物推理小説新人賞受賞。以降、次々と作品を発表し、『カデイスの赤い星』で第96回(昭和61年度下期)直木賞受賞。
- ・1997年 博報堂を退社し、神田神保町に事務所を構えて執筆活動に専念。
現在、日本推理作家協会常任理事。

博報堂時代はサラリーマンとして、31年3か月勤めました。体もかなりサラリーマン化しております。背広とネクタイが馴染んでおりますが、普段はカジュアルな格好で過ごしております。

私は、杉並区には縁がないわけではなく、現在は明大前に住んでおります。甲州街道を杉並区と隣り合わせで、ちょっと歩くともう杉並区です。また、私は会社に入った昭和41年から8年ほど杉並区に住んだことがあります。南荻窪3丁目34番地だったと思います。南荻窪の駅から歩いて15分くらいの閑静な高級住宅街の、そのはずれのあばら屋に住んでおりました。

私が作品を書く場合、その土地は、やはり自分がよく知っている場所を使います。もちろん、地図を見ながら書くのですが、土地鑑のあるところとないところでは、ぜんぜん違います。よく知っているところだと、そのタバコ屋の角を曲がると本屋があって、などと描写しやすいものです。

今日は何を話そうかと考えたのですが、元々勉強が好きではなかったこともあり、あまり固い話はやめまして、ざっくばらんに、今日に至った経緯でもお話をし、皆様のご参考になれば、と思っております。

実は、昨日、私はテレビに出たのですが、どなたかご覧になった方はいらっしゃいますか。いらっしゃらないようですね。NHKの衛星第2放送で午後11時から、俳優の江守徹さんと、女性の映画評論家の方と3人でお話をしました。テーマは何かといいますと、11月5日から、「ローハイド」という、私が学生時代に見たテレビ西部劇を、連日で16本放送することになり、そのPRを兼ねたものでした。その打ち合わせは、神田神保町にある私の仕事場でした。そこにはコート掛けがあるのですが、コートを掛かっていなくて、ガンベルトが掛かっているのです。それを見て、プロデューサー始め、スタッフ全員が男性でしたので興味をお持ちになられたので、スタジオでガンベルトを腰に巻いて、早撃ち

アクションを披露したわけです。みんなが目を丸くしたものです。以前、高速道路で改造ガン撃つという事件があったりして、そういうことが起きるとエアガンなど、警察の規制もうるさくなりまして、私のような無邪気なガンファンは非常に迷惑します。今回も、テレビで映すのは難しいと思っていたのですが、ちゃんと放映してくれたのでうれしかったですね。西部劇の早撃ちは、私にとって、歴史の長い趣味なんです。いまだに続いていまして、端から見ればくだらないと思われるでしょうが、私にとっては、人生の重要な楽しみのひとつになっているのです。

私が生まれたのは、昭和 18 年、まだ戦争中でした。その前の年でしたか、ミッドウェー海戦で負けて、敗戦色の濃い時です。戦争中、私は田舎の方に疎開しておりまして、戦後、父と二人の兄とで上京しました。母親は、その前、昭和 20 年に結核で亡くなっております。

私の父は、挿し絵画家をしておりました。もっぱら時代小説専門で、今ではもう亡くなられた、山手樹一郎、海音寺潮五郎、山本周五郎といった方々の作品に挿し絵を描いておりました。その父は、まもなく 95 歳になります。画家は長生きと言われますが、その通りですね。10 年前に大腸がんの手術をした際、もうだめだろうと言われたので、私も覚悟を決めたのですが、手術は成功し、今も元気に仕事をしており、私の小説の挿し絵を描いてくれたりしています。

戦後は、その父と兄と、私は文京区の団子坂というところで暮らしました。女手がないので、家政婦さんや近所のおばさんたちにお世話になりました。娯楽のない時代でしたので、子どもの頃からよく本を読みました。子どもが遊ぶことといたら、本を読む以外には、野球か相撲、あるいは映画や寄席に行く程度です。この 5 つは、現在に至るまで趣味として続いています。相撲は相手がいないのでなかなかできませんが、野球は草野球でピッチャーもキャッチャーもやります。キャッチャーは立ったり座ったりと、よく足腰を使います。年齢と共に筋力は衰えます。放っておくと弱くなる一方です。30 代の頃からスポーツクラブなどにも通いましたが、長続きしません。そこで、日常生活の中でやれることをやろうと考え、もう 20 年以上もスクワットをしています。加齢で最初に弱るのは脚だそうですからね。スクワットは、ただ立ったり座ったりの単純なものなので、飽きないように、ヒゲをそりながらやったり、歯磨きをしながらします。腕立て伏せもやっています。今も 20 回くらいやっています。また、NHK の第一と第二のラジオ体操を立て続けにやります。セットでやっても 10 分程度で済みます。大した運動にはなりませんが、現状を維持するには十分効果的でしょう。若い頃のようなスタミナはありませんが、同世代の人よりはかなり体力があると思っています。運動を始めるのは早ければ早いほどいいので、皆さんにもお勧めしたいものです。また、ちょっとした小さな運動でもいいですから、きちんと長く続けることが大切です。ラジオ体操も、きちんとやれば、結構運動になります。私も、最初にやったときは、翌日筋肉痛になったものです。

ちょっと余談になりましたが、そのように、読書に親しみ、野球をしたり、映画や寄席に通いながら、子ども時代を過ごし、やがて中学受験を迎えます。父は、小学校を卒業するとすぐに絵の修行で働き始めました。当時は、そういう人は多くいたわけですが、後になって、もう少し勉強しておいた方がよかったと考えたのかも知れません。また、自分のように絵の才能でもあれば、腕一本で生きてゆくことはできますが、そうでないなら学歴があった方がよいと考えたのでしょう。子どもたちは私立の学校に入れてきちんと大学まで行かそうと思ったようです。実際、兄弟三人そろって絵の才能には恵まれませんでした。上の兄たちは上京当時、中学と高校でしたので、私立に編入、小学生だった私は、団子坂の近くにある私立の開成中学校を受験しました。ところが、入学して、最初の試験では、60 人中 42 番という悲惨な結果でした。小学校の時はあまり勉強しなくてもクラスで 1 番か 2 番だったこともありました。

せめて 10 番くらいだろうと思っていたので、少し落ち込んだのですが、考えてみたら、まだ下に 18 人もいる。これで安心してしまい、結局、あまり勉強はしないままで過ごしてしまいました。当時から小説がいのものを書いておりました。子どもの頃に好きで読んでいたアルセーヌ・ルパンを真似て、フランス人の泥棒が出てくるような小説でした。

当時の開成中学は、試験の成績で座る席を決めました。級長と副級長は、それぞれ後ろと前の端に座るのですが、それ以外の生徒は、成績順に、級長の隣から 1 番、2 番と並ぶわけです。座っている場所で、一目で成績が分かってしまう。生徒たちを発奮させてやる気を出させるためもあったのですが、今では考えられないシステムです。私はいつも 40 番台なので、前から 2 列目や 3 列目を行ったり来たりしていました。ところが、中学 2 年の 2 学期の期末試験の時、山が当たったのでしょう、突然クラスで 12 番の成績をとりました。席も後ろから 2 列目に移動し、ポロアパートから一戸建てに引っ越したような気分で、周りにいるのは知らない生徒ばかりです。口を利いたこともない秀才ばかりですが、たまたま私の左隣に S 君がいて、仲良くなります。彼は非常に大人びた少年で、でっぷり太っているのっしのっしと歩きます。若白髪まであるものですから、よく大学生と間違われたものです。彼が住んでいる家は、池袋の歓楽街を抜けた所にありました。毎日そういう所を通って通学したこともあるのでしょうか、すっかりまかせていました。読む小説も見る映画も大人と変わりがありません。彼に刺激されて、私も背伸びして“濡れ場”のある小説を書いたりしたものです。それを S 君に読ませると、「小説には思想というものがなければならない。君の小説には、その思想が欠けている」なんて批判されたこともあります。でも、「君には文才があるから、書き続けるように」と励ましてくれたものです。彼とは高校も一緒に、今も親しい友だちの一人です。さすがに、直木賞をとったあとは「君には文才がある」とは言わなくなりましたが（笑）

そして中学、高校と小説を書き続けていましたが、開成は進学校ということもあり、大学受験が近づくと、さすがに進路を考えるようになりました。S 君が言うには、これからはスペイン語の時代であり、中南米に飛躍すべきだと。それで東京外国語大学のスペイン語科を受けることにしました。英語科とフランス語科は倍率が高いということもありました。第一次試験は英語だけでした。アメリカのハードボイルド小説を原語で読んでいたので、割合英語は得意だったので問題なく通りました。しかし、二次試験には国語や日本史があり、さらにそれまではなかった数学まで入試科目に入っていたのです。私は子どもの時から算数は大の苦手です。そこで二次試験は、国語と歴史で点数を稼ごうとしたのですが、他の受験生も同じだったのでしょう。そんな中で数学のいくらかできる人が合格したわけです。ということで、外国語大学はあえなく落第。そこで第二志望の早稲田大学の政経学部を受験しました。ところが、ここも落ちてしまいます。ちなみに、一緒に受けた S 君は合格しました。結局、最後は、中央大学の法学部を受けて合格しました。中央大学の法学部は定評があります。せっかく入ったのですから、私も将来は法曹界に進もうと、がんばって勉強するつもりでおりました。ところが、研究会の教室をのぞいたら、とても私がいられる雰囲気ではなく、早くも法曹界へ進むことは諦めました。諦めが早いのが私の取り柄です。

中学、高校と男子校だったので、大学では女子学生とも親しくなりたいと思っていたのですが、中央大学の法学部にはほとんど女子学生がいません。そこで、ギターの勉強を始めることにしました。当時、「禁じられた遊び」がリバイバルヒットしていたのです。最初はクラシックから始めたのですが、元々ギターは民族楽器ということもあり、クラシックの作曲家たちは、あまりギターの商品を作曲していません。コンサートを開く時も、ピアノ作品をギター用に編曲したりと苦労したものです。そんなある日、当時からよく通っていた神保町にあった古い喫茶店で、フラメンコギターの曲が流れていたのを聞き、

その音色に魅せられてしまいます。フラメンコはインドに発祥したジプシー民族が始めた音楽なので、楽譜がありません。耳で聞いて覚えるのですが、その自由さに、すっかりはまり込みました。ギターにはまりこんだまま、やがて就職の季節を迎えます。すでに法曹界へ行くことは諦めて、文筆の才能を生かせるマスコミの世界を目指そう、と考えておりました。最初に朝日新聞を受けました。私は、一次試験だけは必ず通るので、朝日も一次は通りました。そして面接まで残り、面接官からさまざまな質問を受けます。面接官の一人が「君はなかなか作文の成績がいいようだね」と誉めてくれ、「朝日に入ったら、どんな仕事をしたいのかね」と聞いてきました。私は即座に『天声人語』を書きたい」と答えました。すると面接官は笑ったものです。なぜ笑うのか、いま考えれば分かりますが、当時の私には理解できませんでした。そのことが原因かとうかは分かりませんが、案の定、朝日新聞は落ちこみました。次に文藝春秋を受けます。ここも一次は通り、面接に臨みます。面接官の一人に非常に無愛想な人がいて、「君は編集部門を希望しているようだが、広告や営業に配置されたらどうするのかね」と尋ねてきました。「入社できたら何でもやります」というのが模範解答なのでしょうが、「私のためにも、御社のためにも編集で使ってもらう方がいいと思います」と答えました。結局ここも落とされました。ちなみに、この面接官は、池島信平さんという名編集者として有名な人でした。そして、よもや入るとは思っていなかった博報堂に入社することになりました。いまでこそ博報堂は人気企業の一つと言われ、東大の法学部を出たような人が銀行を蹴って入って来たりしますが、私が入った当時は社会的に認知されていませんでした。広告会社にはコピーライターという職種があって、仕事の中身は詳しく知りませんが、文筆で食べてゆこうと思っていた私には向いていると考えたわけです。博報堂が最後の試験で、その前に受けた朝日と文藝春秋の結果はまだ出ておらず、いずれかに受かると思っていたので、博報堂の面接の時は言いたい放題に話をしたものです。生意気だと思われた面接官もおられたでしょうが、ざっくばらんに話をしたことが功を奏したのか、合格してしまいました。実は、博報堂だけでなく電通も受けておりました。博報堂の試験の後に、電通の一次試験に合格したという知らせが入ります。しかし、博報堂の自由な雰囲気と、何より私の好きな神保町から離れたくないので、電通の二次試験には臨みませんでした。電通の担当者が、「うちを蹴って博報堂に行くのか」と驚いたことを記憶しています。そして、博報堂に入ってみて、業界一位の電通と二位の博報堂との間には、売り上げで3.8倍の差があることを知ってびっくりしたものです。その後も、この差はなかなか縮まらず、私が博報堂を退社する直前、つまり30年かかって、ようやく月間の売上高が2倍を切るというところまでこぎつけました。制作面やプレゼンテーションでは負けることはありませんでしたが、政治力などでは電通にはかなわなかった。力のある会社だったということです。博報堂を退社する少し前に、業界の裏話を元に、電通と博報堂との攻防戦を書きました。

広告会社には入ったものの、しかし、私はコピーライターにはなれませんでした。コピーライターには、短い文章で消費者の気持ちをつかむ才能が要求されます。私にはそういう才能はなかったのでしょうか。長い文章を書く方が向いている、と判断されたのか、最初に配置されたのはPR部門でした。新聞記者に対してクライアントの新製品情報や社長のコメントなどを要領よくまとめて、そのまま新聞記事として使えるような文書資料を作る仕事をしました。そのことが、結果として文章修行になったと思います。

大学にしても就職にしても、第三志望のところへしか入れませんでした。広告業界は、私にとっては楽しい世界でした。私と同じように、最初の志望は別のところでありながら広告の世界に入って来た人も少なくなく、教養豊かで物知りの人たちが大勢いました。こういう人たちから大いに刺激を受けました。教養と知識の違いは、甚だ難しい問題ですが、知識というのは生活に役に立つもの、教養というの

は何の役にも立たないものというふうに私は考えています。その何の役にも立たないものが、人生を結構豊かにしてくれるということは、本好きの方だったらお分かりいただけるだろうと思います。雑学も教養のうちと、よく言われますが、いろいろなことをよく知っている人というのは、それだけで結構畏敬の念を持って見られるということが、私の子どものときからありました。これは学歴ということとまったく関係なしです。たとえば、作家の中でも池波正太郎さんとか出久根達郎さんは、決して学歴のある方ではないのですが、非常にたくさんを知っていらっしゃるわけです。それで小説も面白い。これは学問の問題じゃないのです。

さて、スタッフ部門への配転をきっかけに、夜遅くまで新聞記者と酒を飲むこともなくなり、夕方6時頃には退社して、家で過ごす時間も増えました。そこで、自由な時間をどう使うか、と考えました。すぐに思い浮かんだのは、中学、高校と授業中に先生の目を盗んで書いていた小説のことで、大学時代にも1本くらいは書いたのですが、入社以来、ほとんど小説とは無縁でした。そこで、ここでひとつ、きちんとした作品を書こうという気持ちになりました。主人公は私と同じ業界に生きるPRマン、スタイルは学生時代から親しんだハードボイルド、舞台は、フラメンコギターを通じて知ったスペインにしました。それ以前に、スペインにも旅行をしていましたが、内戦後30年を過ぎても、まだ戦争の爪痕があちこちに残っていました。社会的な成熟は、日本とは20年ほど遅れていましたが、非常に素朴なところが気に入っていたものです。現在のスペインを知るためには、いまだに影響を残すスペイン内戦について研究しないといけないと考え、資料となる多くの本を購入しました。スペイン語も日常会話程度ならできましたが、こちらで文法の本を買って勉強しました。そして、スペイン内戦を軸に、フラメンコギターを絡め、ハードボイルドのスタイルで小説の執筆に取り組みました。この小説の中に、私自身の青春のすべてを詰め込んだといっても過言ではないでしょう。ただ、最初は、この小説を本として出版するつもりはありませんでした。ただ、書きたいから書いた、というのが正直なところです。原稿もコクヨの原稿用紙に横書きで、しかもシャープペンシルで書きました。編集者は、横書きの原稿をいやがります。しかも、鉛筆書きの原稿は文字が光って読みづらいものです。1年かけて、原稿用紙1400~1500枚程度の大作になりました。完成すると、誰かに読んでもらいたくなります。父親の知り合いの編集者に預けたのですが、なかなか読んでもらえない。それも当然です。1冊の本は原稿用紙にしてせいぜい300枚から400枚です。素人が書いた1400枚もの原稿を読むのは大変です。そこで初めて、作家になろうと決意しました。作家になれば読んでもらえるだろうと。そして、小説雑誌への応募のために作品を書き始めました。当時、文藝春秋が「オール読物」という雑誌を発行しており、同誌に推理小説新人賞という賞があり、そこに応募しました。私は、当然入賞すると自信満々でした。ところが1回目も2回目も一次は通りましたが、最終予選には残らない。ようやく3回目の応募でめでたく受賞することができました。これで作家の端くれになったわけですが、会社は辞めませんでした。会社勤めを続けながら、17年間、小説を書いてきました。賞を取って、注文も入るようになり、編集者とのつき合いも深くなると、何か長い作品はありませんか、と尋ねられます。そこで、例の1400枚の作品を取り出して見せるのですが、さすがに敬遠されます。ところが、それまで初版どまりだった私の作品が、4、5作目くらいから少し売れるようになり、直木賞候補としても名前が挙がり始めます。そうすると編集者も態度が変わります。ある一人の編集者が、その大作を読んでおもしろいと言ってくれました。この作品を世に出すため作家になったようなものですから、とても感激したことを覚えています。書いた当初「さらばスペインの日々」というロマンチックなタイトルを付けたのですが、その編集者は、そのタイトルでは売れないと言います。タイトルにスペインという言葉が入っていると、スペインに関心

のある人は読んでくれるだろうが、興味のない人は見向きもしないだろう、というのがその理由です。そこで、作品の中のある章のタイトルが「カディスの赤い星」だったので、これではどうかと尋ねると、それなら良いでしょうという返事。カディスだってスペインの地名なのですから、よく考えたら理屈に合わない話ですが。この作品で直木賞を受賞し、ようやく作家として一人前になり、読者にも編集者にも責任を持つ立場になったと思いました。

博報堂はフランクな雰囲気ので、社員が作家として稼いでも目くじらを立てることはありませんし、その反対にチャホヤすることもありませんでした。こういう会社の空気が、サラリーマンと作家という二足の草鞋をはいてやってこられた最大の要因だと思います。もちろん、だれもが作家になれるわけではなく、お金が稼げるわけでもありません。私自身、お金を稼ぐために作家になったわけではなく、これまでにお話をしたように、ずっと“第三志望の人生”を送ってきたわけです。諦めずにやってきたこと、子どもの頃から好きだったことを忘れずに続けてきたこと、それが長続きした要因だろうと思います。

皆さんの中にも、子どもの頃には、切手やさまざまなものを集める趣味を持っておられた方がおられると思います。コレクションというのは知的作業の根本になります。コレクトして、たとえばあるテーマについて80%ぐらい集まったなと感じられた時に、分析が始まるのです。分析をしていくと、一つひとつの断片的な情報がまとまって、一つの間人像なり世界像が出来てくるわけです。

しかし、大人になると、ほとんどの人は、それをやめてしまいます。そこにはさまざまな理由があるでしょうが、子どもの頃、それだけの時間とお金をかけても惜しくない、と思ったことをやめてしまうのはもったいない。自分は、そのことが好きだから没頭したはずですね。時にそのことを思い出していただきたいと思います。自分の人生を、仕事とお金を稼ぐことだけに費やさずに、個人の楽しみのためにも有効に使っていただきたいと考える次第です。